

安全データシート

According to JIS Z 7253:2012
改訂日 2019-2-05
版 4.01

1. 化学品及び会社情報

製品名	アクリル酸
製品コード	017-00773,011-00776
CAS No	79-10-7
化学式	CH ₂ :CHCOOH
製造者	富士フィルム和光純薬株式会社 大阪市中央区道修町三丁目1番2号 Tel: 06-6203-3741 Fax: 06-6201-5964
供給者	富士フィルム和光純薬株式会社 大阪市中央区道修町三丁目1番2号 電話:06-6203-3741 FAX番号:06-6203-2029
緊急連絡電話番号	試薬営業本部西日本営業部 06-6203-3741 試薬営業本部東日本営業部 03-3270-8571
推奨用途及び使用上の制限	試験研究用
社名変更のお知らせ	2018年4月1日より、和光純薬工業株式会社から富士フィルム和光純薬株式会社へ社名を変更いたしました。

2. 危険有害性の要約

GHS分類

物質又は混合物の分類

引火性液体	区分3
急性毒性(経口)	区分4
急性毒性(経皮)	区分3
急性毒性-吸入(蒸気)	区分3
急性毒性-吸入(粉じん/ミスト)	区分4
皮膚腐食性/刺激性	区分1
眼に対する重篤な損傷性/眼刺激性	区分1
特定標的臓器毒性(単回暴露)	区分1, 区分2
区分1 呼吸器系, 腎臓	
区分2 肝臓	
特定標的臓器毒性(反復暴露)	区分1
区分1 呼吸器系	
水生環境有害性(急性)	区分1
水生環境有害性(長期間)	区分2

絵表示



注意喚起語

危険

危険有害性情報

H226 - 引火性液体及び蒸気
H314 - 重篤な皮膚やけど・眼の損傷を起こす

H318 - 重篤な眼の損傷をおこす
 H302 - 飲み込むと有害
 H311 - 皮膚に接触すると有毒
 H331 - 吸入すると有毒
 H332 - 吸入すると有害
 H400 - 水生生物に非常に強い毒性
 H411 - 長期的影響により水生生物に毒性
 H370 - 以下の臓器に障害を生じる 呼吸器系, 腎臓
 H371 - 以下の器官を損傷するおそれがある: 肝臓
 H372 - 長期暴露または反復暴露により以下の臓器に障害を生じる: 呼吸器系

注意書き(安全対策)

- 取扱い後には顔や手など、ばく露した皮膚を洗う。
- この製品の使用時には飲食、喫煙は禁止。
- 保護手袋、保護衣、保護眼鏡、保護面を着用すること。
- 室外もしくはよく換気された場所でのみ使用すること。
- 粉じん/煙/ガス/ミスト/蒸気/スプレーを吸入しないこと。
- 環境に放出しないこと。
- 熱、火花、裸火、熱い面から離して保管すること-禁煙。
- 容器は密閉して保管。
- 受信装置と容器をしっかりと固定/接地する。
- 耐爆電気/換気/照明/機器を使用すること。
- 火花の出ない道具のみ使用すること。
- 静電放電に対し、予防措置を講ずること。
- 冷所保存

注意書き(応急措置)

- 眼に入った場合、数分間目を付けて洗浄する。もしコンタクトを装着していて、容易に取り外せるなら、取り外す。その後も洗浄を続ける。
- ただちに医師に連絡すること。
- 体調がすぐれない場合、毒物管理センター、医師に連絡すること。
- 再使用前に汚染された衣服を洗う。
- 皮膚または髪に付着した場合、汚染されたすべての衣服をすぐに脱ぎ、水やシャワーで皮膚を洗うこと。
- 吸入した場合、新鮮な空気のある場所に移動させ、呼吸が楽な姿勢で休憩させる。
- 体調がすぐれない場合、毒物管理センター、医師に連絡すること。
- 飲み込んだ後に、気分が悪い場合、毒劇物センターもしくは医師に連絡してください。
- 口をすすぐ。
- 無理に吐かせないこと。
- 火災の場合:消火には、二酸化炭素、粉末消火剤、フォームを使用する。
- 漏出物を集めること。

注意書き(保管)

- 施錠して保管。
- 容器をしっかりと閉め、よく換気された場所で保管。

注意書き(廃棄)

- 内容物および容器は承認された廃棄物処理場に廃棄すること。

その他

ほかの危険有害性 情報なし

3. 組成及び成分情報

純物質もしくは混合物 混合物

化学式 CH₂:CHCOOH

化学名	重量パーセント	分子量	化審法官報公示番号	安衛法官報公示番号	CAS番号
アクリル酸	98.0	72.06	(2)-984	(9)-2	79-10-7

不純物または安定化添加剤 安定剤: ヒドロキノンモノメチルエーテル 約 0.02%

4. 応急措置

吸入した場合

新鮮な空気のある場所に移すこと。症状が続く場合には、医師に連絡すること。

皮膚に付着した場合

すぐに石鹸と大量の水で洗浄すること。症状が続く場合には、医師に連絡すること。

眼に入った場合

眼に入った場合、数分間目を付けて洗浄する。もしコンタクトを装着していて、容易に取り外せるなら、取り外す。その後も洗浄を続ける。直ちに医師の手当てを受ける必要がある。

飲み込んだ場合

口をすすぐ。意識のない人の口には何も与えないこと。ただちに医師もしくは毒物管理センターに連絡すること。医師の指示がない場合には、無理に吐かせないこと。

応急処置をする者の保護

個人用保護具を着用すること。

5. 火災時の措置

消火剤

水スプレー(水噴霧)、二酸化炭素(CO₂)、泡、粉末消火剤、砂

使ってはならない消火剤

利用可能な情報はない

特有の消火方法

利用可能な情報はない

火災時の特有危険有害性

熱分解は刺激性で有毒なガスと蒸気を放出することがある。蒸気は空気と爆発的混合物を形成することがある。

消火を行なう者の保護

個人用保護具を着用すること。消防士は自給式呼吸器および消火装備を着用する必要がある。

6. 漏出時の措置

人体に対する注意事項、保護具及び緊急時措置

屋内の場合、処理が終わるまで十分に換気を行う。漏出した場所の周辺に、ロープを張るなどして関係者以外の立ち入りを禁止する。作業の際には適切な保護具を着用し、飛沫等が皮膚に付着したり、ガスを吸入しないようにする。風上から作業して、風下の人を待避させる。

環境に対する注意事項

漏出した製品が河川等に排出され、環境への影響を起こさないように注意する。汚染された排水が適切に処理されずに環境へ排出しないように注意する。

封じ込め及び浄化の方法及び機材

乾燥砂、土、おがくず、ウエス等に吸収させて、密閉できる空容器に回収する。

回収、中和

利用可能な情報はない

二次災害の防止策

環境規制に従って汚染された物体および場所をよく洗浄する。

7. 取り扱い及び保管上の注意

取扱い

技術的対策

火気厳禁。高温物、スパークを避け、強酸化剤との接触を避ける。局所排気装置を使用すること。

注意事項

容器を転倒させ落下させ衝撃を与え又は引きずる等の粗暴な扱いをしない。漏れ、溢れ、飛散などしないようにし、みだりに粉塵や蒸気を発生させない。使用後は容器を密閉する。取扱い後は、手、顔等をよく洗い、うがいをする。指定された場所以外では飲食、喫煙をしてはならない。休憩場所では手袋その他汚染した保護具を持ち込んではいない。取扱い場所には関係者以外の立ち入りを禁止する。

安全取扱注意事項

静電気放電(有機物の蒸気を引火させうる)を避けるために必要な措置をとる。個人用保護具を着用すること。皮膚、眼、衣服との接触を避ける。

保管**安全な保管条件****保管条件**

容器は遮光し、換気の良いなるべく涼しい場所に密閉して保管する。施錠して保管。

安全な容器包装材料

ガラス

混触禁止物質

強酸化剤

8. ばく露防止及び保護措置**設備対策**

屋内作業場での使用の場合は発生源の密閉化、または局所排気装置を設置する。取扱い場所の近くに安全シャワー、手洗い・洗眼設備を設け、その位置を明瞭に表示する

ばく露限界

化学名	日本産業衛生学会	管理濃度 作業環境評価基準	米国産業衛生専門家会議 (ACGIH)
アクリル酸 79-10-7	N/A	N/A	TWA: 2 ppm Skin

保護具**呼吸器用保護具**

有機ガス用防毒マスク

手の保護具

不浸透性保護手袋

眼の保護具

側板付き保護眼鏡(必要によりゴーグル型または全面保護眼鏡)

皮膚及び身体の保護具

長袖作業衣

適切な衛生対策

産業衛生および安全の基準に基づいて取り扱う。

9. 物理的及び化学的性質**形状****色**

白色～ほとんど白色 融解時 無色～ほとんど無色

濁度

澄明(融解時)

性状

塊 又は 液体

臭い

特異臭

pH

データなし

融点・凝固点

11-14 °C

沸点, 初留点及び沸騰範囲

141.0 °C

引火点

50 °C

蒸発速度

データなし

燃焼性(固体、ガス)

データなし

燃焼又は爆発範囲**上限:**

8.0%

下限:

2.9%

蒸気圧

データなし

蒸気密度

2.49 (air=1)

比重・密度

1.047-1.055 g/ml (20°C)

溶解性

水, エタノール, アセトン: 極めて溶けやすい。

n-オクタン/水分配係数

データなし

自然発火温度

428 °C

分解温度

データなし

粘度(粘性率)

データなし

動粘度

データなし

10. 安定性及び反応性**安定性**

安定性	光により変質するおそれがある。
反応性	データなし
危険有害反応可能性	
通常処理ではなし。	
避けるべき条件	
高温と直射日光、熱、炎、火花、静電気、スパーク	
混触危険物質	
強酸化剤	
危険有害な分解生成物	
一酸化炭素 (CO)、二酸化炭素(CO ₂)	

11. 有害性情報

急性毒性

化学名	経口LD50	経皮LD50	吸入 LC50
アクリル酸	33.5 - 3200 mg/kg (Rat)	300 - 600 mg/kg (Rat) , 295 - 950 mg/kg (Rabbit)	14.4 mg/L (Rat) 4 h

化学名	急性毒性(経口)分類根拠	急性毒性(経皮)分類根拠	急性毒性(吸入-ガス)分類根拠
アクリル酸	ラットの経口LD50値として、33.5-3,200 mg/kgの範囲で複数の報告 (環境省リスク評価第10巻 (2012)、PATTY (6th, 2012)、NITE初期リスク評価書 (2008)、EU-RAR (2003)、ACGIH (7th, 2001)、EHC 191 (1997)、IARC 19 (1979)、ECETOC JACC (1995)) がある。分類ガイダンスに基づき、最も多くのデータ (340 mg/kg (ACGIH (7th, 2001)、EHC 191 (1997)、ECETOC JACC (1995)、IARC 19 (1979))、1,250 mg/kg (ACGIH (7th, 2001)、ECETOC JACC (1995))、1,337 mg/kg (環境省リスク評価第10巻 (2012))、1,350 mg/kg (EHC 191 (1997)、EU-RAR (2003)、ECETOC JACC (1995))、1,500 mg/kg (ECETOC JACC (1995)) が該当する区分4とした。	ラットの経皮LD50値として、300-600 mg/kg (NITE初期リスク評価書 (2008))、ウサギの経皮LD50値として、280 mg/kg (PATTY (6th, 2012))、294 mg/kg (環境省リスク評価第10巻 (2012))、295 mg/kg (IARC 19 (1979)、EHC 191 (1997)、ECETOC JACC (1995))、300 mg/kg (EU-RAR (2003))、640 mg/kg (EHC 191 (1997)、EU-RAR (2003)、ECETOC JACC (1995))、640 mg/kg (環境省リスク評価第10巻 (2012))、750 mg/kg (IARC 19 (1979)、EHC 191 (1997)、ECETOC JACC (1995))、950 mg/kg (IARC 19 (1979)、EHC 191 (1997))、295-950 mg/kg (NITE初期リスク評価書 (2008)) との報告に基づき、区分3とした。	GHSの定義における液体である。

化学名	急性毒性(吸入-蒸気)分類根拠	急性毒性(吸入-粉塵)分類根拠	急性毒性(吸入-毒性-ミスト)分類根拠
アクリル酸	ラットの4時間吸入LC50値として、3.6 mg/L (1,221 ppm) (EHC 191 (1997)、NITE初期リスク評価書 (2008)、IARC 19 (1979)、EU-RAR (2003)、ECETOC JACC (1995)、PATTY (6th, 2012)、> 5.1 mg/L (> 1,740 ppm) (EHC 191 (1997)、NITE初期リスク評価書 (2008)、EU-RAR (2003)、ECETOC JACC (1995)、14.4 mg/L (4,522 ppm) (PATTY (6th, 2012)) の3件の報告がある。区分3と区分4とにそれぞれ1件ずつ該当し、1件は区分を特定できないデータであるため、LC50値の最小値が該当する区分3とした。なお、LC50値が飽和蒸気圧濃度 (5,222 ppm) の	エアロゾルを用いたラットのLC50値として、11,100 mg/m ³ (1時間 (4時間換算値: 2.75mg/L))、26,000 mg/m ³ (0.5時間 (4時間換算値: 3.25mg/L))、7,500 mg/m ³ (2時間 (4時間換算値: 3.75mg/L)) (EHC 191 (1997)、NITE初期リスク評価書 (2008)) との報告に基づき、区分4とした。なお、上述の1時間、0.5時間、2時間ばく露における各LC50値をエアロゾル(ミスト)として4時間換算値に換算すると、飽和蒸気圧濃度 (15.4 mg/L) より低くなり、蒸気相当となるが、エアロゾルでの試験との記載 (EHC 191 (1997)) に基づき、mg/Lを単位とする粉じん及びミストの基準値を適用した。	エアロゾルを用いたラットのLC50値として、11,100 mg/m ³ (1時間 (4時間換算値: 2.75mg/L))、26,000 mg/m ³ (0.5時間 (4時間換算値: 3.25mg/L))、7,500 mg/m ³ (2時間 (4時間換算値: 3.75mg/L)) (EHC 191 (1997)、NITE初期リスク評価書 (2008)) との報告に基づき、区分4とした。なお、上述の1時間、0.5時間、2時間ばく露における各LC50値をエアロゾル(ミスト)として4時間換算値に換算すると、飽和蒸気圧濃度 (15.4 mg/L) より低くなり、蒸気相当となるが、エアロゾルでの試験との記載 (EHC 191 (1997)) に基づき、mg/Lを単位とする粉じん及びミストの基準値を適用した。

	90%より低い場合、ミストを含まないものとしてppmを単位とする基準値を適用した。	
--	---	--

皮膚腐食性及び皮膚刺激性

化学名	皮膚腐食性、刺激性分類根拠
アクリル酸	ウサギに本物質の原液を3分間半閉塞適用した皮膚刺激性試験(OECD TG準拠)において、表層壊死、軽度の浮腫及び変色が認められ、病理組織学的検査では適用部位で深部に至る限局性壊死、壊死部での表皮付属器消失、病巣周囲の中等度表皮過形成及びびまん性炎症反応が認められた(EU-RAR(2002))との報告がある。また、ウサギに本物質の原液を1分間適用した結果、腐食反応を示した(EU-RAR(2002)、ECETOC JACC(1995))との報告がある。さらに、ヒトにおいて1967-1992年の間に2人の作業員は皮膚の腐食のため入院が必要であった(EU-RAR(2002))。以上の結果から区分1Aとした。なお、本物質は、EU DSD分類において「C; R35」、EU CLP分類において「Skin Corr. 1A H314」に分類されている。

眼に対する重篤な損傷性又は眼刺激性

化学名	重篤な眼損傷性分類根拠
アクリル酸	ウサギを用いた眼刺激性試験において、原液の適用により強い刺激性を示し、投与後20日後に眼瞼の癒痕、角膜混濁が持続することが報告されている(NITE初期リスク評価書(2008)、EHC 191(1997)、EU-RAR(2002))。また、ヒトに対しても、眼刺激性を示すとの記載がある(PATY(6th, 2012))。以上の結果から区分1とした。

呼吸器感作性又は皮膚感作性

化学名	呼吸器および皮膚感作性分類根拠
アクリル酸	呼吸器感作性: データ不足のため分類できない。皮膚感作性: ヒトにおいて、1989年以来アクリル酸の工業製品を用いた450人以上の労働者に感作性症状が認められていないという報告(EU-RAR(2002))がある。また、実験動物では陽性と陰性両方の結果がある。モルモットを用いた修正スプリットアジュバント試験において、皮膚反応は0/10匹であり陰性を示した(NITE初期リスク評価書(2008)、EHC 191(1997)、EU-RAR(2002))。モルモットを用いた修正スプリットアジュバント試験では、精製したアクリル酸は陰性であったが、市販のアクリル酸では陽性を示した(NITE初期リスク評価書(2008)、EU-RAR(2002))。なお、EU-RAR(2002)やSIAP(2001)ではアクリル酸に含まれる不純物や重合阻害剤が皮膚感作性を示すが、精製されたアクリル酸では皮膚感作性を示さないとしている(EU-RAR(2002)、SIAP(2001))。以上の結果から、アクリル酸自体は皮膚感作性を持たないと判断し区分外とした。

生殖細胞変異原性

化学名	変異原性分類根拠
アクリル酸	ガイダンスの改訂により「区分外」が選択できなくなったため、「分類できない」とした。すなわち、in vivoではマウスの優性致死試験及びラット骨髄細胞の染色体異常試験で陰性結果が得られている(NITE初期リスク評価書(2008)、環境省リスク評価第10巻(2012)、EU-RAR(2003))。In vitroでは細菌の復帰突然変異試験、哺乳類培養細胞の遺伝子突然変異試験(HGPRT遺伝子座)で陰性である(NITE初期リスク評価書(2008)、EU-RAR(2003))が、哺乳類培養細胞のマウスリンフォーマ試験、染色体異常試験では陽性である(NITE初期リスク評価書(2008)、EU-RAR(2003))。また、仔ウシ胸腺DNAの付加体形成試験で陽性(環境省リスク評価第10巻(2012))、ラット肝臓初代培養細胞の不定期DNA合成試験、シリアンハムスター胚細胞(SHE)の不定期DNA合成試験及び小核試験では陰性(NITE初期リスク評価書(2008)、環境省リスク評価第10巻(2012)、EU-RAR(2003))である。

発がん性

化学名	発がん性分類根拠
アクリル酸	IARCでグループ3(IARC 71(1999))、ACGIHでA4(ACGIH(7th, 2001))に分類されていることから「分類できない」とした。なお、ラットの2年間(104週間)吸入がん原性試験、マウスの2年間(104週間)吸入がん原性試験(いずれも、厚生労働省委託がん原性試験結果(Access on May 2014))でいずれもがん原性は認められていない。また、SIAP(2001)、EU-RAR(2003)で、「本物

	質はラットの経口投与及びマウスの経皮適用による発がん性の証拠はない。また、ヒトばく露と関連した発がん性データはない」と報告されている。ガイダンスの改訂により区分を修正した。
--	--

化学名	NTP	IARC	米国産業衛生専門家会議(ACGIH)	日本産業衛生学会
アクリル酸 79-10-7	-	Group 3	-	-

生殖毒性

化学名	生殖毒性分類根拠
アクリル酸	ラットを用いた経口経路(飲水)での2世代生殖毒試験において、生殖能に影響はみられていないが、親動物に一般毒性(体重増加抑制、摂水量の低下、腺胃粘膜の軽度な浮腫を伴った前胃境界線の軽度な角化亢進)がみられる用量で児動物の体重増加抑制、発育分化遅延(耳管開通遅延、眼瞼開裂遅延)がみられた(EU-RAR(2002))。催奇形性試験としては、ラットを用いた吸入経路の試験において、母動物毒性がみられる用量で胎児体重の低値がみられた(NITE初期リスク評価書(2008))。なお、同一文献を引用した環境省リスク評価第10巻(2012)には、「吸収胚と死亡胎児の増加」の記載があったが、原著(Saillenfait et al., 1999)には吸収胚と死亡胎児の増加には群間で差がみられないとして影響を否定していた。また、ウサギを用いた吸入経路の試験では、母動物毒性がみられる用量で児の発生に影響がみられなかった(EU-RAR(2002))。いずれにおいても、催奇形性はみられていない。上記のとおり、母動物に影響がみられる用量で児に影響が認められたが、発育分化の遅延、胎児体重の低値は発生指標のわずかな変化に該当することから、分類できないとした。

特定標的臓器毒性(単回ばく露)

化学名	特定標的臓器毒性(単回ばく露)分類根拠
アクリル酸	ラットに、経口経路で肝細胞の変性及び壊死(NITE初期リスク評価書(2008)、EHC 191(1997))、嗜眠(EU-RAR(2002))、吸入経路で呼吸器への刺激による鼻周囲の湿潤、痂皮形成、腹式呼吸、呼吸困難、嗜眠、刺激への無反応、気管支粘膜の強い刺激性及び重度の炎症、気管支腔内への滲出物、肺胞腔内のマクロファージ、肺実質内での限局性炎症、肺出血、肺水腫、腎臓のうっ血、肝細胞及び腎尿細管の変性(NITE初期リスク評価書(2008)、EU-RAR(2002)、EHC 191(1997)、ECETOC JACC(1995)、ACGIH(7th, 2001))、ウサギに経皮経路で無気力、努力性呼吸、全身症状の低下、剖検結果で肺水腫(EU-RAR(2002))、呼吸困難(ECETOC JACC(1995))がそれぞれ報告されている。なお、呼吸器、腎臓に対する影響は区分1に、肝臓への影響は区分2に相当するガイダンス値の範囲でみられた。以上より、区分1(呼吸器、腎臓)、区分2(肝臓)とした。

特定標的臓器毒性(反復ばく露)

化学名	特定標的臓器毒性(反復ばく露)分類根拠
アクリル酸	NITE初期リスク評価書(2008)、環境省リスク評価第10巻(2012)、EU-RAR(2002)、ACGIH(7th, 2001)にラットに90日間飲水投与した試験報告が3件あり、うち1報において区分2の上限の用量(2,000 ppm: 100 mg/kg/day相当)で、雄にのみ体重増加抑制がみられたとの記述があるが、標的臓器は特定できない。他の2報告は区分2を超える用量で、腎臓、消化管、肝臓への影響がみられており、すなわち、経口経路では本物質は区分外相当である。一方、吸入経路では、上記情報源に加えて、厚労省委託がん原性試験報告(Access on June 2014)より、本物質蒸気をマウス及びラットに90日間又は2年間吸入ばく露した複数の試験において、区分1の濃度(2-40 ppm: 0.0059-0.118 mg/L/6hr/day)から鼻腔の組織変化(嗅上皮の変性、萎縮、呼吸上皮化生、呼吸上皮の扁平上皮化生、嗅神経線維束の萎縮、鼻咽頭のエオジン好性変化など)が認められたとの記述より、区分1(呼吸器)に分類した。なお、マウスの90日間吸入ばく露試験では、区分1の濃度からヘモグロビン濃度の減少がみられ、血液系への影響が示唆されたものの、他のマウス及びラットの試験では一貫した全身性影響は認められておらず、本物質ばく露による有害性影響は鼻腔への局所影響に限定されると考えられた。

吸引性呼吸器有害性

化学名	吸引性呼吸器有害性分類根拠
アクリル酸	データ不足のため分類できない。

12. 環境影響情報

生態毒性

化学名	藻類/水生植物	魚	甲殻類
アクリル酸	ErC50: <i>Scenedesmus</i> 0.13mg/L 72 h	LC50 : <i>Oncorhynchus mykiss</i> 27 mg/L 96 h	EC50: <i>Daphnia magna</i> 95 mg/L 48 h

その他のデータ

化学名	水生環境有害性(急性)分類根拠	水生環境有害性(慢性)分類根拠
アクリル酸	藻類(セネデスムス)の72時間 ErC50=0.13mg/L(EHC191、1997)他から、 区分1とした。	慢性毒性データを用いた場合、急速分解性があり(BODによる分解度=67.8%(既存点検、1975))、藻類(セネデスムス)の72時間 NOEC(生長速度)=0.016 mg/L(NITE 初期リスク評価書、2008、EU-RAR、2002)であることから、区分2となる。慢性毒性データが得られていない栄養段階に対して急性毒性データを用いた場合、魚類(ニジマス)の96時間 LC50 = 27 mg/L(NITE 初期リスク評価書、2008、EU-RAR、2002、EHC 191、1997)であるが、急速分解性があり(BODによる分解度=67.8%(既存点検、1975))、生物蓄積性が低いと推定される(log Kow= 0.35(PHYSPROP Database、2009))ことから、区分外となる。以上の結果を比較し、区分2とした。

残留性・分解性

分解度: 68 % by BOD (経産省既存化学物質安全性点検)

生体蓄積性

利用可能な情報はない

土壌中の移動性

利用可能な情報はない

オゾン層への有害性

利用可能な情報はない

移動性

13. 廃棄上の注意

残余廃棄物

廃棄は地域、国、現地の適切な法律、規制に則る必要がある。

汚染容器及び包装

廃棄は地域、国、現地の適切な法律、規制に則る必要がある。

14. 輸送上の注意

ADR/RID(陸上)

国連番号	UN2218
品名	Acrylic acid, stabilized
国連分類	8
副次危険性	3
容器等級	II
海洋汚染物質	該当

IMDG(海上)

国連番号	UN2218
品名	Acrylic acid, stabilized
国連分類	8
副次危険性	3
容器等級	II
海洋汚染物質	該当
MARPOL73/78やIBCコードに則つたバルクの輸送	利用可能な情報はない

IATA(航空)	
国連番号	UN2218
品名	Acrylic acid, stabilized
国連分類	8
副次危険性	3
容器等級	II
環境有害物質	該当

15. 適用法令

国際インベントリー

EINECS/ELINCS	収載
TSCA	収載

国内法規

消防法	危険物第四類 第二石油類 危険等級Ⅲ 水溶性
毒物及び劇物取締法	劇物 包装等級2
労働安全衛生法	名称等を表示すべき危険物及び有害物(法57条、施行令第18条) 名称等を通知すべき危険物及び有害物(法第57条の2、施行令第18条の2 別表第9)No. 2 危険物・引火性の物(施行令別表第1 第4号) 優先評価化学物質(法第2条第5項)
化審法	優先評価化学物質(法第2条第5項)
危険物船舶運送及び貯蔵規則	腐食性物質(危規則第3条危険物告示別表第1)
航空法	腐食性物質(施行規則第194条危険物告示別表第1)
海洋汚染防止法	施行令別表第1 有害液体物質 Y類物質
PRTR法	第1種指定化学物質(法第2条第2項、施行令第1条別表第1)
第1種-No.	4
水質汚濁防止法	指定物質(法第2条第4項、施行令第3条の3)
輸出貿易管理令	非該当

16. その他の情報

引用文献および参照ホームページ等	NITE: 独立行政法人 製品評価技術基盤機構 http://www.safe.nite.go.jp/japan/db.html IATA危険物規則書 RTECS: Registry of Toxic Effects of Chemical Substances 中央労働災害防止協会 GHSモデルSDS情報 有機合成化学辞典(社) 有機合成化学協会 講談社サイエンティフィック 化学大辞典 共立出版 等
------------------	---

免責事項

このSDSはJIS Z 7253:2012に準拠しております。記載内容は通常の取扱を対象としたものであって他の物質と組み合わせるなど特殊な取扱いをする場合は使用環境に適した安全対策を実施の上ご利用ください。改訂日における最新の情報に基づいて作成されておりますが、すべての情報を網羅しているものではありませんので新たな情報を入手した場合には追加又は訂正されることがあります。また、安全な取扱い等に関する情報提供を目的としておりますので物性値や危険有害性情報などは製品規格書等とは異なりいかなる保証をなすものではありません。全ての製品にはまだ知られていない危険性を有する可能性がありますので取扱いには十分ご注意ください。

GHS分類はJIS Z7252(2014)に準拠している。*JIS: 日本工業規格

製品についてのご案内

新社名へ切替を行う間、旧社名のラベル表示がある製品がお手元に届く場合がございます。

以上